

〈欲望と快楽の倫理学〉序章

國分功一郎

0. なぜ〈欲望と快楽の倫理学〉か？

- ・『暇と退屈の倫理学』の三つの結論。
 - (1) 通読
 - (2) 人間であることを楽しむこと＝贅沢を取り戻すこと
 - (3) 動物になること＝とりさらわれること
- ・楽しむには訓練が必要（ラッセル）。
- ・しかし、楽しむとはどういうことなのか？ そもそも楽しさとは？ 快（快楽）とは何か？
→『暇倫』ではフロイトの快の定義を引用してはいるが…。

1. 哲学と快楽

- ・哲学は快楽についてあまり考えてこなかった。
- ・快楽主義の哲学はあるが…。

2. カントの批判哲学における快の問題

- ・カントは倫理学の書である『実践理性批判』で快 Lust を定義している。

生 *Leben* とは……

あるものが欲求能力の法則にしたがって行動する能力である。

欲求能力 *Begehrungsvermögen* とは……

そうした存在者の持つ能力であり、この存在者が自らの表象を通じ、そこで表象されている対象を実現する原因たりうる能力のことを指す。

快 *Lust* とは……

対象ないし行為と、生の主体的条件との一致の表象のことである。生の主体的条件とはすなわち、対象が自らの対象を実現する能力のことを指す。¹

→乱暴にまとめると…

欲望（欲求）：自らが思い描くものを実現したいという気持ち

快（快楽）：何事かを実現する能力と現実との一致によってもたらされる感情

- ・しかしカントのこの定義は暫定的なもの。カントはこの後、下級欲求能力と上級欲求能力とを区別する。
→その時、快楽はどうなるか？ ドゥルーズによる解説を参照すると…

純粋実践理性は、欲求能力を規定する原理として、いかなる快楽をも、いかなる満足をも排除する。しかし、欲求能力は、法則によって決定される時、まさしくそのように決定されることによって満足を感じる。感性的な諸傾向から自分たちが独立しているという事態を表現する消極的な一種の享楽、我々の悟性と理性の形式上の一致を直接に表現する純粋に知的な満足を感じる。²

→とりあえずのところ快楽を否定。しかし、倫理的な行為（「法則によって決定される」行為）の結果、

¹ カント『実践理性批判』カント全集第七巻、岩波書店、二〇〇〇年、一三二ページ〔Kant, *Kritik der praktischen Vernunft*, Felix Meiner, Philosophische Bibliothek, 2003, p.11〕。大幅に改訳。読みやすいように改行などを付加。原文の強調は削除。

² ドゥルーズ『カントの批判哲学』ちくま学芸文庫、二〇〇八年、七九ページ〔Gilles Deleuze, *La philosophie critique de Kant*, PUF, Quadrige, 2004, p.55〕

高級な「知的満足」がやってくる(らしい)。ジュパンチッチによる解説を参照すると…

カントの倫理は、原理のためにすべての快楽を捨て去ることを要求するただの禁欲主義ではない。[…] 倫理的な主体には快楽が禁止されているということではない。ただそのような主体にとっては、快楽は何の魅力もないだけである。それが手の届くところにあったとしても、もはや欲しくはないのである。このような一見陰鬱な考えは、ある意味で我々の励みになるかもしれない。倫理の王国に入るためにすべての快楽を犠牲にしなければならぬなどと恐れる必要はない。なぜなら一旦そこに入ってしまうと、もはやこれらは犠牲または喪失とは感じられないからである。³

→たとえば転校生との別れの悲しみ。

・とはいえ、この高級な「知的満足」は快楽とは違う⁴。

→ならば、高級な快楽とは何か？

→快そのものを扱うのは、美学の書である『判断力批判』。

・高級な快楽とは「判断するという純粋な作用の感性的表現」。「これは美しい」という美的判断こそが高級な快⁵。

→カントの用語で(ややこしく)言うと、美の判断とは、自由になった構想力と無規定な悟性の一致。

・以上は何を意味するか？

→カントは確かに快(快楽)について語っているが、それは美の問題の中に包み込まれてしまう。

3. 美は可能か？——村上靖彦による美の純粋性への批判

・カントは「美しい」という判断をいくつかの判断から区別している。

(1) 「このバラは美しい」と「このバラは好ましい」の違い。

それゆえその人が「カナリア諸島産のワインは好ましい *angenehm*」と言う場合、他の人がこの表現を訂正して、彼は「このワインは私にとつて好ましいのだ」と言うべきだと注意しても、彼は喜んで満足する。これは、舌・口・喉の味覚だけでなく、眼や耳にとつて各人に快適であり得るものでも同様である。ある人には紫色は物静かで愛らしく、他の人には生気がなく死んだようである。ある人は管楽器の音を好み、他の人は弦楽器の音を好む。[…] それゆえ好ましいものに関しては、各人はそれぞれに固有の趣味(諸感官の)をもつという原則が妥当する。／美しいもの場合には、事情はまったく異なる。もしも自分の趣味の良さを幾分自負する或る人が「この対象(我々が眼前に見る建築物、或る人が身につけている服、我々が聴いている音楽、批評を受けるために提出された詩)は私にとつて美しい」と言って、自分の正しさを弁明しようと考えたとすれば((好ましさの場合とは)全く逆に)笑うべき事であろう。[「美しい」と言う時、人は]満足についての彼の判断に全ての人が一致することを当てにするのではなく、彼らにこの一致を要求するのである。⁶

(2) 「このバラは美しい」と「バラというものは一般に美しい」の違い。

たとえば、自分が眺めるバラについて私は、趣味判断により「美しい *schön*」と言明する。これに反して、多くの個別的表象の比較によって生じる判断、すなわち「バラというものは一般に美しい *die Rosen überhaupt sind schön*」という判断は、もはや単に美的判断として言い表されているのではなく、ある美的判断に基づいた論理的判断として言い表されている。ところで、「このバラは(においが)好ましい *die Rose ist (im Geruche) angenehm*」という判断は、美的な、しかも個別的な判断ではあるが、しかし趣味判断ではなく、感官判断であ

³ アレンカ・ジュパンチッチ『リアルの倫理——カントとラカン』河出書房新社、二〇〇三年、二二ページ〔Alenka Zupancic, *Ethics of The Real – Kant, Lacan*, Verso, 2000, p.8〕

⁴ 「[知的な]満足は感性的効果でも、特殊な感情でもなく、感情の知的な「類似物」である」(ドゥルーズ『カントの批判哲学』、九六ページ)。カントによれば、倫理がもたらす「知的満足」は、快の感情に似ているに過ぎない。

⁵ ドゥルーズ『カントの批判哲学』、九七ページ〔Deleuze, *La philosophie critique de Kant*, p.68〕

⁶ カント『判断力批判』カント全集第八巻、岩波書店、一九九九年、第七節、六七～六九ページ〔Kant, *Kritik der Urteilskraft*, Felix Meiner, Philosophische Bibliothek, 2001, §7, p.59-60〕。

る。⁷

- ・しかし、純粋に「美しい」という判断は可能なのか？
- ・村上靖彦は自閉症児の行動（頭を叩き続ける、水滴を見続ける、紐を回し続ける…）を解説して次のように言う。

感性的印象が運動感覚や視線触発と結びつくことなく、そして言語とも結びつくことなく意味を生成するとき、それは美と名づけられるのであろう。〔…〕カントが示したとおり、美とは（形を作り出す力である構想力において）感性の自己組織化が生み出す快である。つまり概念による規定なしに（そして同時に自我のかかわりなしにひとりでに）感性的な形が生成する。⁸

- ・ここでポイントは、「定型発達」の場合には美の体験に極めて多くの条件が必要だということ。

定型発達の人においても、風景に見入っている場合のように、条件が揃えばこれと似た美的触発の世界が成立する。

ただし定型発達の場合、純粋な美的触発はないだろう。カントは、美は概念を前提としないにもかかわらず、構想力が最終的には悟性によって包摂される、という言い方で、定型発達における美の不純さを暗示している。〔…〕悟性の働きがなければ趣味の共有はできないであり、それゆえ、重度の自閉症児の世界が仮に本書の主張通り美であるとしても、彼らはそれを他の人とは共有しないのである。

〔多くの哲学者が感覚を議論の出発点としてきたが〕しかし実は自閉症児にとってのみ、純粋な感覚の世界が経験の出発点となる。定型発達にとっては純粋な感覚というのは出発点ではなく、抽象作用の結果得られる帰結である。言語や自我、悟性、対人関係をかっこに入れたときに出現する可能性の極限値の一つである。たとえば二〇世紀の抽象芸術の冒険は、この極限値を可能性として追求したものとして特筆されるだろう。⁹

- ・美の不純性。「このバラは美しい」が「バラというものは一般に美しい」から完全に自由ではありえない。
→美とは自由な感性の自己組織化が生み出す快であるが、そこには概ね悟性の概念的作用が入り込む。
→この不純性故に美的な判断も他者との共有が可能。不純さこそが言葉で言い表わせる美の条件。
- ・村上の主張を更に推し進めれば、「このバラは美しい」は「このバラは好ましい」からも完全に自由ではありえないと言うことができる。

4. 快と純度の問題

- ・カントは
「このバラは美しい」（美的判断＝美しさ）
「バラというものは一般に美しい」（論理判断）
「このバラは好ましい」（感覚的判断＝好ましさ＝快）
の三つを厳密に区別して、純粋な美を取り出そうとしているが、実際にはこれらは入り交じっている。
→しかも、入り交じっているからこそ美的判断は伝達可能。
- ・ならば、この入り交じった混合物を「好ましさ」の側から見ることができるのではないかと。つまり、快、快楽、楽しさ、喜ばしさ……なんと言ってもよいが、美に入り交じる夾雑物と思われていたものを、ここから積極的に定義できるのではないかと。
- ・カントが言うように、快とは「対象ないし行為と、生の主体的条件との一致の表象」である。そしてこの「一致」には様々な不純な要素が働きかける。

⁷ カント『判断力批判』、第八節、七二ページ〔Kant, *Kritik der Urteilstkraft*, §8, p.64〕。

⁸ 村上靖彦『自閉症の現象学』頸草書房、二〇〇八年、九ページ。

⁹ 村上靖彦『自閉症の現象学』、九ページ、二〇六ページ注（八）、一〇ページ。強調は引用者。

→快、快樂、楽しさの本質とは不純さである。

・実はカントも快適さには様々な段階・程度があると言っている。

したがって満足を与えるものはすべて、それが満足を与えるというまさにこの点で、快適なのである（そして様々な程度に応じて、あるいは他の快適な感覚との関係に応じて、楽しい *anmutig*、好ましい *lieblich*、嬉しい *ergötzend*、喜ばしい *erfreulich*、などになる）¹⁰。

・フロイトは快原理という考え方にに基づき、興奮量の減少こそが生物にとっての快であると述べた（『暇と退屈の倫理学』第七章参照）。

→これは恐らく正しいが、しかし極論である——おそらく、カントの美についての議論が、正しいけれども極論であるのと同じ意味で。

・次のような直線を考えてみるができる。



【快の極端】

純粹な快
興奮量の減少
(フロイト)

【楽しさ、快、快樂、喜ばしさの不純な連続態】

身体的快・表象の実現・利益関心・
趣味の満足・美の感覚……の夾雑物
(バルト)

【美の極端】

感性の純粹な
自己組織化
(カント)

→いま名前を挙げたように、おそらくこの不純な連続態から快（快樂）について考えていたのが、ロラン・バルトである。

5. 快樂と享樂——ロラン・バルト『テキストの快樂』

・快樂の不純さ。とりさらわれないこと。

愛する者と一緒にながら、別のことを考える。もっともよい考えが得られるのはそういう時だ。仕事に必要なことがもっともうまく思いつく。テキストについても同様だ。テキストは、私に間接的に聞いてもらえるようになると、私の中に最高の快樂〔*plaisir*〕を生じさせる。読んでいて、何度も頭を上げ、他のことに耳を傾けたい気持ちになればいいのである。私は必ずしも快樂のテキストに捉えられているわけではない〔*Je ne suis pas nécessairement captivé par le texte de plaisir*〕。それは移り気で、雑多で、忙しく、ほとんど落ち着きがないとも言える行為かもしれない。思いがけない頭の動き。それは、我々が聴いていることは何も耳にせず、我々が耳にしないことを聴いている鳥の動きのようなものだ。¹¹

→テキストの快樂は集中していない読書において現れる不純なもの。

→『暇と退屈の倫理学』の三つ目の結論との関係。

・バルトがテキストの快樂を感じる例。

私は『ブヴァールとペキュシェ』の中で次のような文を読んで、快樂を覚える。「ナブキンやシーツやタオルが、ぴんと張った紐に木製の洗濯ばさみで留められて、垂直にぶら下がっていた〔*Des nappes, des draps, des serviettes pendaient verticalement, attachés par des fiches de bois à des cordes tendues*〕。¹²

¹⁰ カント『判断力批判』、第三節、五八ページ〔*Kant, Kritik der Urteilkraft*, §3, p.51〕。

¹¹ ロラン・バルト『テキストの快樂』みすず書房、一九九一年、四六ページ〔*Roland Barthes, Le plaisir du texte*, Seuil, Point Essais, 2000, p.36〕

¹² ロラン・バルト『テキストの快樂』、五〇ページ〔*Barthes, Le plaisir du texte*, p.38〕。

→？

→しかし、快楽はそもそも不純。極めて複雑な個人的要素が絡み合って成立する。

→『暇と退屈の倫理学』の二つ目の結論との関係。「退屈と気晴らしが独特の仕方では混じり合っている」(ハイデッガー)、そのような生を楽しむこと。

・バルトはラカン派精神分析を参照しながら、この「快楽 plaisir」を「享楽 jouissance」に対立させている。

→その際のポイントが、快楽は言葉で言い表せるが、享楽はそうではないということ。

〔快楽と享楽は程度の差なのかどうかよく分からないと書いた上で…〕

もともと、精神分析に由来する、快楽のテキストと享楽のテキストとを対立させる間接的手段がある。すなわち、快楽は言葉で言い表せるが、享楽はそうではない〔le plaisir est dicible, la jouissance ne l'est pas〕というものだ。／享楽は言い表せない〔in-dicible (内部で言われる)〕、禁じられている〔inter-dite (言われたことの間にある)〕。私が念頭においているのはラカン(「忘れてはならないのは、享楽は語る者に対して、それ自体としては禁じられているということ、あるいは、行間でしか語られ得ない〔…〕ということである」と、ルクレール(「〔…〕自らの言葉で語る者には享楽が禁じられている。あるいはそれと相関して、享楽を享受する者は、あらゆる文字を——そして、語られ得るあらゆる言葉を——自らが讃える破棄という絶対者の中で消滅させてしまう」)。¹³

・快(快楽)が「言葉で言い表せる」という論点は重要。

→村上が言っていた、美的判断の不純性故の伝達可能性。最高度に純化された美的体験は伝達不可能。

・美と快の混合物において、美の純度が高ければ高いほど語ることは難しくなる。

→純度の高い美の場合に批評が必要となるのはそのため。批評家にしか言葉で言い表せない、しかし皆が体験できる美がある。

・バルトは、快楽／享楽について、快楽は「間接的生産」(集中していない読書等)を前提しているとか、「退屈は享楽から遠くない。退屈とは快楽の岸から見た享楽である」など興味深いことを述べている¹⁴。

・しかし、次のようにも述べる。

「享楽／快楽。用語の上ではまだこの区別は揺れている。私もつまずくし、ごちゃ混ぜにしている」¹⁵。

→バルトもよく分かっていない。

→享楽は「苦しむことの快楽」(ニーチェ)？

・なぜ哲学が快や快楽や楽しさといったものをうまく取り扱えなかったのか？

→その不純性。たとえば性的な快楽も不純。

・バルトは自作を分類する中で『テキストの快楽』を「道徳性 moralité」の項目に入れている¹⁶。

→『暇と退屈の倫理学』の結論に快楽の話が出てくることの意味。

6. 結論に代えて——欲望と快楽

・〈欲望〉を重視するジル・ドゥルーズと〈快楽〉を重視するミシェル・フーコーの対立。

→ドゥルーズはフーコーに当たった手紙で次のように述べる。

最後に会った時、ミシェルは優しさと愛情を込めて、僕におおよそ次のようなことを言った。自分は欲望 désir という言葉に耐えられない、と。〔…〕僕が「快楽 plaisir」と呼んでいるのは、君たちが「欲望」と呼んでいるものであるのかもしれないが、いずれにせよ、僕には欲望以外の言葉が必要だ、と。

¹³ ロラン・バルト『テキストの快楽』、三九～四〇ページ〔Barthes, *Le plaisir du texte*, p.31-32〕。

¹⁴ ロラン・バルト『テキストの快楽』、四八～四九ページ〔Barthes, *Le plaisir du texte*, p.37〕。

¹⁵ ロラン・バルト『テキストの快楽』、七ページ〔Barthes, *Le plaisir du texte*, p.10〕。

¹⁶ ロラン・バルト『彼自身によるロラン・バルト』みすず書房、二二八ページ。

言うまでもなく、これも言葉の問題ではない。というのは、僕の方は「快樂」という言葉に耐えられないからだ。では、それはなぜか？ 僕にとって欲望には何も欠けるところがない。更に欲望は自然と与えられるものでもない。欲望は機能している異質なもののアレンジメントと一体となるだけだ。〔…〕快樂は欲望の内在的過程を中断させるように見え、僕は快樂に少しも肯定的な価値を与えられない。〔…〕マゾッホの中で僕の興味を引くのは苦痛ではない。快樂が欲望の肯定性、そして欲望の内在野の構成を中断してくるという考えだ。〔…〕快樂とは、人の中に取まりきらない過程の中で、人や主体が「元を取る」ための唯一の手段のように思える。それは一つの再領土化だ。¹⁷

→ドゥルーズにとっては、欲望という「過程」しかない存在しないということか？

→ドゥルーズは欲望と言いながら、ある種の純粋な満足を目指していたのではないか？ フーコーの方が快樂の不純さをよく知っているのではないか？

→ドゥルーズは暇倫の三つ目の結論のことしか考えていなかったのではないか？ 欲望のエリート主義？ カント的な「知的満足」あるいは「美的な快の感情」とドゥルーズの欲望主義。

・欲望と快樂の対立をどう考えていくか？

¹⁷ ジル・ドゥルーズ「欲望と快樂」、『狂人の二つの体制 1975-1982』河出書房新社、二〇〇四年、一八〇～一八一ページ〔Gilles Deleuze, « Désir et plaisir », *Deux régimes de fous*, Minituit, 2003, p.118-120〕